

アンモナイトというのは、アンモナイトの仲間（アンモナイト亜綱／Ammonoidea）の総称です。決して1種類ではなく、古生代から中生代まで、3億年以上もさまざまな進化を遂げながら、世界中の海で大繁栄をした軟体動物頭足綱（とうそくこう）の仲間です。世界中のさまざまな地域の地層からおびただしい数の化石が見つっていますが、現在の地球には1匹も生き残っていません。「オウムガイはアンモナイトの生き残り」というのは、明らかに誤りです。「現生種のオウムガイと化石種のアンモナイトは、共通の祖先を持つ」という言い方も、実は必ずしも正確とは言えません。

アンモナイトの仲間（アンモナイト亜綱の生物）は、白亜紀後期（約6500万年前）に絶滅しました。（新生代初期まで生き延びたという説もあります）アンモナイトというと、きれいな渦巻き状の形態を思い浮かべますが、絶滅の近づいた白亜紀後期になると、いくつかの異変が起きました。その一つが「異常巻きアンモナイト」の出現です。巻がゆるい種類（例えばハミテス）、巻が非常に複雑になった種類（例えばニッポニテス）、巻を失った種類（例えばバキュリテス）などです。そのような化石は日本の北海道でもたくさん見つっていますが、「異常巻きアンモナイトの子は同じ異常巻き」であり、決して1個体だけの「奇形」ではありません。つまり異常巻きの形態ごとに1つの種を形成していたということです。

国立科学博物館は異常巻きアンモナイトのコレクションで有名で、常設展示でも見るすることができます。先日訪れた、「神奈川県立生命の星・地球博物館」にも見事な標本がいくつも展示されていて、完全に目が釘付けになってしまいました。

（2025年5月上旬／神奈川県立生命の星・地球博物館）

